社会イノベーション研究
第 11 巻第 2 号（123-134）
2016 年 3 月

2016 年 3 月 1 日掲載承認

子供の詩を読む

―文学と言語コミュニケーションに関する覚書―

川　村　晶　彦

1.　はじめに

文学とは言語を通じて表現された芸術，そしてその作品を研究対象とする学問分野を指すというのが一般的な理解であろう。ニュー・クリティシズムといった批評手法を例に出すまでもなく，文学作品は作者の伝記的事実を参照せず，さらに社会的・歴史的な文脈から切り離しても一定の理解が可能なはずである。それは文学が言語を用いて成立するからであり，作品が書かれている言語の母語話者であれば，その言語能力[1)] のみを根拠としてもある程度は作品を読み解くことができるはずだということである。

言うまでもなく，文学作品を真に理解するということは単なるプロットの理解を指すのではなく，それ以上の深いレベルでの理解を指すわけであるが，文学の表現手段である言語を直接の研究対象とする言語学の研究成果は少なからず文学理解にも貢献できるはずであり（cf. 池上 1967），優れた文学研究には必ず語用論的考察が含まれるという指摘もある（大沼 2001）。さらに，小説や詩といったジャンルの違いを問わず，文学作品には作者から読者に対するメッセージが込められているという点で，コミュニケーションの一形態ととらえることも可能であろう。

本小論は，極力背景知識等を排除したうえで，言語コミュニケーション研究の知見のみを頼りにどこまで文学作品の理解が可能となるか，その検証を試み

るものである。題材とするのは全国紙の朝刊で紹介されたある子供の詩である。子供の詩を選んだ理由としては，主に紙幅の制限である。あくまでも言語表現を主な手掛かりとして分析を行うためには小説といった分量の多いジャンルではなく，全文引用が可能な短い詩でなければならない。また，今回題材とした詩には自身が詩人である選者による寸評も加えられており，そちらも考察の対象にしたいと考えている。さらに，文学作品には作者の人生経験等にまつわる価値観なども少なからず反映されているはずであるが，上述のように，今回はそういった伝記的背景知識などは極力排除して分析を試みることが目的のため，比較的人生経験の浅い子供の作品を用いることにも意味はあるのではないかと考えている。

以下，各節において具体的に検討を行う。

2.　分析

2.1　わらったよ

以下は読売新聞朝刊で連載されていた「こどもの詩」というコーナーで2008年に掲載されたある詩の全文である[2)]：

わらったよ

おとうさんが
おさらを回しながら
なっとうを食べた
おとうさんがわらった
わたしもわらった
2人でわらった
ふたりのかぞく

これに選者である詩人の長田弘氏の評が続く：

黙ってもくもくは，だめ。食事は，話して，笑って，いっしょに楽しまなくちゃ，おいしくないんだ。

タイトルおよび選者の評からは，一見楽し気な父子の食事の風景を描いた詩と読めるかも知れない。しかし，果たしてそうであろうか。少なくとも，コミュニケーションの原則的には，この詩は決して楽しい父子の様子を描いただけではないと考えられる。では，自身が詩人である選者は全く的外れな評をしたのだろうか。特にこの２つの疑問に対して，以下の節にて具体的に分析を試みる。

2.2　コミュニケーションの原理

応用言語学におけるコミュニケーションの原理としてもっともよく引用されるものの一つに日常言語学派の哲学者グライスが提唱した協調の原理 (Cooperative Principles) がある。かつてはコミュニケーションを成功させるための原理であるとの誤解も多く，事実，強調の原理とその４つの公理全てに従ってコミュニケーションを行えば，非常に効率よくコミュニケーションは進むはずである。また，命令法で記述されているため，コミュニケーション上のアドバイスと感じられるかもしれない。しかしながら，協調の原理によってグライスが目指したものは，いわゆる文字通りの意味を超えた言外の意味がいかに伝わるのか，より正確に言えば，聞き手がいかにその含意の存在に気がつき，どう解釈するかを説明することである。以下が協調の原理である：

> Make your conversational contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged. (Grice 1975)

協調の原理はさらに具体的に以下の４つの公理によって成立する：

量 (Quantity) の公理

1. Make your contribution as informative as is required (for the current purpose of the exchange).
2. Do not make your contribution more informative than is required.

質 (Quality) の公理

Try to make your contribution one that is true:

1. Do not say what you believe to be false.

2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

関連性 (Relation) の公理

Be relevant.

様態 (Manner) の公理

Be perspicuous:

1. Avoid obscurity of expression.
2. Avoid ambiguity.
3. Be brief (avoid unneccsssary prolixity).
4. Be orderly.

(Grice *ibid.*)

グライスによると，会話の含意が生じるのは，上記の原理及びその公理に明らかに違反した時である[3)]。

まず，質の公理を例にとってみよう。めったに手に入らない泡盛を見つけたとする。たまたま居合わせた上司がその泡盛を飲みたがっていたことを知っていたので勧めたところ，その上司は車の運転をしなければならないのでその泡盛を飲むことができない。そういった状況でその上司が「そんな泡盛べつに飲みたくない」と言ったとしても，その発言は明らかに本心ではないと思われる。つまり，質の 1. に違反している。文字通りには「飲みたくない」と言っているが，ここでは「本当は飲みたいのだがそれを認めるのはしゃくだ」という負け惜しみという含意が生成されていると解釈できるということである。

同様に，他の公理，たとえば関連性の公理に違反する例としては，誰かの悪口を言っていて，その本人が近づいてきた場合などが挙げられるだろう。一緒に悪口を言っている相手がまだそのことに気がついていない時など，話し手はそこで急に話題を変え，関連性のない話を始めたりするかも知れない。すると，相手も何かあるな，と気がつく。ここで生じる含意は，「その話題はやめよう」という警告である。

人はコミュニケーションにおいて，常に思ったままを口にするわけではない。しかしながら，それでも，会話の含意をはじめ，いわゆる言外の意味などを通じてメッセージを伝達することが可能である。これは文学作品にも当てはまる

であろう。次節において，主にこの協調の原理から詩の分析を試みたい。

2.3　コミュニケーションの原理に基づいた分析

協調の原理の４つの公理：質，量，関連性，様態から冒頭の子供の詩を分析するには，まず，何らかの点で上記の公理に違反がないかどうかを確認しなければならない。具体的には，嘘を言っていないか，証拠のないことを言っていないか，必要十分な情報量があるか，情報量が多すぎはしないか，関連のあることを言っているか，分かりにくくないか，二通りに解釈ができないか，簡潔であるか，整然と順序立てて説明されているか，といった点である。

協調の原理に基づいてこの詩を読むと，最初に疑問に思うのは，母親について一切の言及がない点である。詩の最後は「ふたりのかぞく」と締めくくられているが，子供が家族について語るとき，父親だけでなく母親についても触れるのが一般的であろう。しかしながら，この詩では母親について一切の言及がない。家族について語りながら，子供の家族の構成員である可能性が高い母親についての記述がないということは，必要十分な量の情報が提供されておらず，量の公理に違反していると解釈することができる。言うまでもなく，二人だけの家族は決して珍しいものではなく，そのこと自体には何ら価値判断をくだす意図はないが，ここで生じる含意は，この家庭には何らかの理由で母親が不在であるということである。

さらに，量の公理に着目すると，「わらったよ」というタイトルに加え，たった７行の詩に３回も「わらったよ」という表現が用いられている点も見逃してはならないだろう。なんらかの理由で母親のいない「ふたりのかぞく」が笑ったということがこの作者である子供にとっては詩を通じて伝えたい特別なイベントであったに違いない。

父子が笑ったという点について，コミュニケーションにおいて伝達される情報，特に新情報と情報構造という点からもみてみたい。新情報とはメッセージの受け手にとって既知の旧情報を前提とした，文字通り新しい情報であり，それによってメッセージの受け手の認知環境を改善，言い換えるならば旧情報の修正などの基にもなる情報のことである。詩というものの性質を考えるならば，この詩の主題と言ってもよいかもしれない。

英語のような強勢型リズム言語と異なり，日本語の場合は文末に新情報が来るエンドフォーカスの原理は働かない。日本語の基本語順は SOV であり，文

単位で考えた場合，文末には動詞が来るのが原則だからである（cf. 縄田 2015）。したがって，一般的に新情報は文末でなく動詞の直前の目的語の位置に来ることが多い。今回の詩に登場する目的語は「おさら」と「なっとう」だけであり，特に本詩の解釈において重要なものとは思われないが，「わらった」という自動詞の含まれた3つの文が詩の後半にあるということは偶然ではないであろう。文ではなく談話レベルの場合，日本語の新情報は後半に現れることが多いからである。さらに，最初の「わらった」の含まれた文の主語は「おとうさん」であるが，1行目で既に父親が登場しているのにもかかわらず，新情報を示す格助詞の「が」が用いられている（cf. 中右・神尾・高見 1998）。つまり，ここでは「父親」が笑った主題であるということ，あるいは「父親が笑った」という命題自体が新情報として描かれているということである。

「わらったよ」というタイトルからも，作者にとって「ふたりのかぞく」が「わらった」ことはとても特別なことだったのであろうが，そのきっかけとなったのは父親が笑ったことだと解釈できる。

量の公理から，作者の家庭はおそらく父子家庭なのだろうということ，さらにこの父子が笑ったことこそ特に作者が強調したい主題であったと推測される。そして，情報構造の点からも，この父と子が笑ったことは何か特別な出来事だったのではないかと推論できる。元々めったに笑わない父親と子供であったのか，何らかの理由でしばらく父子は笑うことがなかったのか。冒頭の3行からは，父親が子を笑わせるために楽しげな雰囲気を演出しようとしていることも想像できるが，コミュニケーションの原理からは，この詩が単なる仲のよい父子の楽し気な食事の光景を描いたものではないと言えそうである。

2.4　ポライトネス

2.2および2.3でみた協調の原理は，コミュニケーションにおける基本原理であり，通常はそれに従っていることが想定されている。そのため，人は協調の原理に従うことができない時，そのことを言語的に明示するのが普通である。たとえば，また聞きで証拠のない発言をする場合は質の公理の2.に違反するため，人は「まだ確認をとっていないのですが」などと言って言質をとられないようにする。これは，決して理路整然と論理的に話す状況に限らず，日常の会話であっても，様態の公理の3.に違反する場合など，「話が長くなるんだけど」といった前置きはよく耳にする。この2つの例に共通して言えることは，

何らかの外的制約によって協調の原理に従えないということである。また，上述のように，グライスは話し手が言外の意味を伝えるためにも協調の原理に違反をすると指摘している。さて，ここで疑問が生じる。確かに人は無意識に協調の原理に従うことも多いであろうが，2.2 でも指摘したように，グライスは協調の原理をよりよいコミュニケーションのためのアドバイスとして提唱したわけではない。外的制限が存在する場合と含意を生じる場合以外に協調の原理に違反することはないのだろうか。

リーチは協調の原理を「救出する」ものとしてポライトネスの原理 (Politeness Principles) を提唱している (Leech 1983)。協調の原理に従えば，コミュニケーションを効率よく行うことは可能になるが，必ずしもコミュニケーションを円滑に進めるとは限らない。人は，相手を傷つける可能性があると思えば，嘘も口にするし，内容を省略したり，話を逸らせたり，ぼかした発言をすることがある。つまり，他者への配慮から 4 つの公理に従わない場合があるということである。現実のコミュニケーションにおいて，ポライトネスは協調の原理に背く主要な理由の一つと言ってよいだろう (Thomas 1995)。

ポライトネスとはしばしば「丁寧」と混同される概念であるが，丁寧よりははるかに広く，対人コミュニケーションにおける他者への配慮全般を指す。ここで言う他者への配慮とは，フェイス (face) ＝面子 (Goffman 1955) を適切に管理することである。ブラウン＆レヴィンソンによると，フェイスには積極的フェイスと消極的フェイスという 2 つの側面がある (Brown & Levinson 1987)。きわめて単純化して説明すると，前者は周りの人間から認められたい，好かれたいという欲求であり，後者は周りの人間に束縛されたくない，利用されたくないという欲求である。対人コミュニケーションにおけるポライトネスとは，話し手と聞き手が相互のフェイスを尊重し[4]，それを侵害しないことである。

次節にて，ポライトネスの観点から詩の分析を試みる。

2.5　ポライトネスからの分析

2.3 では主に協調の原理から詩の分析を試みた。少なくともコミュニケーションの原理から見る限り，この詩は決して単なる仲のよい父子の楽し気な食事の光景を描いたものではない。何らかの理由で母親のいない父子家庭が主題であり，恐らく父親は子供を笑わせるために明るくふるまっている。そして，最後には，何らかの理由であまり笑わない，あるいはしばらく笑うことのな

かった父が笑い，次いで作者である子供もそれに加わる。「ふたりのかぞく」が笑ったのである。作者にとって，父親と一緒に笑ったことはこの詩を通じて表現したい特別な出来事であったと考えられる。

家族について語りながら，母親への言及がないという事実から，母親が不在であるという会話の含意が生成されるが，作者はなぜ母親について何も触れていないのか。単に触れたくないという理由も十分にありえるが，それではなぜ触れたくないのか。この点に関しては，この詩の本文だけでは答えは出そうにないが，可能性としては，ポライトネスが関わっていることが想定される。2.4 で述べたように，ポライトネスは協調の原理に違反する主要な理由の一つだからである。母親に言及することでフェイスを侵害される恐れがあるのは，たとえば父親である。母親が不在であることと，この父子にとって笑うことが特別であったことに何らかの関連があるのかどうかこの詩だけからは確認のしようがないが，詩の最初の 3 行からは，父親が何らかの目的で明るくふるまっているであろうことが見て取れる。仮に母親がいない子供を元気づけるためにそうしていたのであれば，母親への言及は父のそんな努力を否定する行為であり，父の積極的フェイスへの侵害と考えられなくもない。ただし，これは詩とコミュニケーションの原理だけで説明のつく問題ではないため，これ以上は立ち入らない。

さて，この詩には選者の評も加えられているが，本詩はタイトルから想像されるような楽しいだけの詩ではない。そう考えると，詩人でもある選者の以下の評はあまりにも表面的であるという印象を受ける：

> 黙ってもくもくは，だめ。食事は，話して，笑って，いっしょに楽しまなくちゃ，おいしくないんだ。

鋭敏な言語感覚を備えているはずの詩人である選者がこの詩における作者のメッセージを読み誤ったのであろうか。

こういった状況における小学生の行動パターンを思い浮かべてみると，長田氏の評が上記のような形になった理由はポライトネスの観点から容易に説明がつく。自分の詩が選ばれて新聞に載った。きっとその子はその詩が載った紙面を楽しみにするだろう。そして，万が一そこに母親が不在であるといった点などに言及があったとすれば，心を痛めるかもしれない。父親もまたそんな子供

の様子を見て心を痛めるかもしれない。選者の評は新聞の読者だけに向けられたものではない。当然ながら，作者である子供や子供の家族にも向けられている。ポライトネス研究の最初期のものの一つであるレイコフのポライトネスの規則には Make A (ddressee) feel good—be friendly (Lakoff 1973) とあり，これに従えば，詩の作者である子供やその保護者の感情を傷つけるような評は好ましくない。そのため，それを回避するのは当然の行動である。

長田氏はおそらくこの詩を正確に理解した上で，作者や父親をはじめとする関係者の感情を考慮し，楽し気な光景であったという点だけにコメントをしている。リーチは自身の提唱するポライトネスの原理の一つ，ポリアンナの原理を participants in a conversation will prefer pleasant topics to unpleasant ones (Leech *ibid.*) と説明しており，好ましい状況だけに注意を払うことでもポライトネスを実現することができると指摘している。上記の選者の評はこの原理からも説明がつく。

ポライトネス研究で現在主流となっているブラウン＆レヴィンソンのフェイス理論は積極的フェイスと消極的フェイスのみから全てのポライトネスに関わる現象を説明しようとするものであり，多くの批判もある。その中の一つに，フェイス理論はコミュニケーションの目的を考慮に入れていないというものがある。スペンサー＝オーティーは，そのため，自身の提唱するラポールマネジメント理論 (Rapport Management Theory) ではポライトネスを実現する要素の一つとして Interactional goals を挙げている (Spencer-Oatey 2000)。通常，コミュニケーションの参与者同士は特定の目的をもってコミュニケーションを行っており，その目的に反するやりとりは，どのようなストラテジーを用いても決して相手に十分な配慮をしたとは言えないということである。

たとえば，長い会議が終わりに近づいて，参加者が皆，もうじき終わりだと期待している時に，そのうちの一人が「今頃になって先ほどの話を蒸し返すのは誠に申し訳ないんですが，先ほどの件はやはりおかしくないですか」と発言したとする。ここでこの人物がどのような物言いをしたとしても，決して場の雰囲気は和まない。全ての議論が終わったと仮定し，会議を終了させる，という共通の目的に向かって進みつつある中で，その目的そのものを否定する行為となるからである。結果として，参与者のフェイスは侵害されるということである。

今回，分析の対象としている「わらったよ」は，そのタイトルとは裏腹に，

決して明るく楽しいだけの詩とは思われない。長田氏の一見，表面的にも見えるコメントはこの Interactional goals の点からも説明が可能であるように思える。文芸評論家がプロの作家の作品を批評する場合，批評家はその作品を正確に読み解き，その芸術性についてもできるだけ客観的に判断する必要があるに違いない。これがいわゆる文芸評論の目的であろう。子供の詩の場合はどうだろうか。無論，選者として，よいと思われる詩を選択する必要があることは言うまでもないが，ここでの選者の評の目的は客観的に作品を批評することではないということである。

3.　まとめ

本稿では，子供の書いた一編の詩とその選者との紙面を通じて行われたメッセージの伝達を，言語コミュニケーション研究の知見に基づき分析を試みた。あくまでもコミュニケーションや言語学の見地から子供の詩を分析したものであり，テキストと言語コミュニケーション研究の知見から判断できる範囲外には深く立ち入らなかったが，現実のコミュニケーションにおいては，話し手と聞き手の共有する知識全てが総動員される。その意味では，状況から導き出される推論なども詩の解釈の基礎となり得なくはない。さらに，文学研究として作品を分析するためには，そういった推測などを作者の伝記的事実や時代背景などから実証するという作業が必要になるであろう[5)]。ただし，今回のように言語コミュニケーション研究における知見を基にすることでも，テキストのプロットを理解するだけの表面的な解釈よりは深い理解が可能になると言えそうである。

今回は新聞に掲載された詩だけでなく選者による寸評も分析の対象とした。詩および寸評を通じて行われているコミュニケーションは，新聞の読者という不特定多数を対象としているだけでなく，この詩を読むであろう作者の父親に対する作者のメッセージ，そしてその詩の評を読むであろう作者と作者の父親に対する選者からのメッセージ伝達をも含んだ複層構造になっているが，この特殊な形態のコミュニケーションにおいても，コミュニケーションにおける重要な対人機能であるポライトネスは深く関わっているのである。

謝辞

平成 2015 年 3 月をもって成城大学を退職された斎藤忠志教授には常日頃から酒席などで文学と言語に関して貴重なご示唆をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。なお，本研究は平成 26－27 年度成城大学特別研究助成（研究課題「コミュニケーションにおける対人機能としてのポライトネス研究」，研究代表者　川村晶彦）および JSPS 科研費 25370729（研究課題「ポライトネス指導のための総合的研究－指導内容と指導方法の確立に向けて」基盤 C　代表川村晶彦）による助成を受けている。

注

1）　理論言語学におけるいわゆる狭義の「言語能力」はチョムスキーの提唱する「言語運用」と対立する概念であるが (Chomsky 1965)，ここではそれよりも広く，言語の母語話者が日常のコミュニケーションにおいて運用していると思われる能力全般を指す。

2）　本小論では掲載された詩の作者である児童の個人情報保護の観点からも，あえて掲載日と作者の氏名はここでは挙げない。

3）　違反と一口に言っても，話し手の意図や外的制約の有無などによってさまざまに分類されるが，本小論ではそれらの詳細には立ち入らない。詳しくは Thomas (1995) 参照のこと。

4）　ブラウン＆レヴィンソンは話し手か聞き手どちらか一方のフェイスのみを対象としているが，現実のコミュニケーションにおいては両方を適切に管理する必要がある。

5）　仮に推測をもって本小論でのここまでの分析を補足することが許されるのであれば，作者は母親を失ってまだ間もないのではないかという印象を禁じ得ない。しばらくはその喪失感を克服できなかった娘のために父親は精一杯明るくふるまっている。そして，そういう父親の愛に応えるように，作者にも気力とそういった父親の愛に満たされているという幸福感がよみがえってくる。それで父が笑い，作者も笑った。詩の最後は「ふたりのかぞく」と結ばれており，上記の推測に基づいて読むと，これから 2 人で強く生きていくのだ，という作者の強い決意のようなものが感じられる。「こどもの詩」の応募要項では詩を作ったきっかけや状況なども書き添えるようになっており，仮に上記のような事実があったとすれば，選者である長田氏はそういった状況についても承知していたかもしれない。いずれにせよ，長田氏の評は新聞の読者だけでなく，作者である子供，そしてその父親へのメッセージである。2004 年 12 月から 2015 年 5 月まで「こどもの詩」を担当した長田弘氏はこの論文の構想を練り始めた 2015 年春に逝去されたが，悲しみのためしばらく笑っていなかったかもしれない「ふたりのかぞく」に対して，もっと笑いなさい，幸せになりなさい，というメッセージを送っていたように思われてならない。

引用文献

Brown, P., and S. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Usage,* Cambridge: Cambridge University Press

Chomsky, N. (1965) *Aspects of the Theory of Syntax,* Cambridge: MIT Press

Goffman (1955) ‘On Face-Work: An Analysis of Ritual Elements of Social Interaction’ in: *Psychiatry: Journal for the Study of Interpersonal Processes* 18 (3), 213-31

Grice, H. P. (1975/1991a) ‘Logic and conversation’ in: P. Grice *Studies in the Ways of Words,* Cambridge: Harvard University Press, 22-40

池上嘉彦 (1967)『英詩の文法―語学的文体論』，東京：研究社

Lakoff, R. T. (1973) 'The logic of politeness; or, minding your p's and q's' in: *Papers from the Ninth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society,* Chicago: Chicago Linguistic Society, 292-305

Leech, G. N. (1983) *Principles of Pragmatics,* London: Longman

中右実，神尾昭雄，高見健一 (1998)『談話と情報構造』，東京：研究社

縄田裕幸 (2015)「日英対照言語学」授業実践報告―言語観の変容を促す授業を目指して―in：『島根大学教育学部紀要』第 48 巻別冊，73-5

大沼雅彦 (2001) 第 9 章第 1 節「小説」in: 小泉保編 (2001)『入門語用論研究』，東京：研究社

Spencer-Oatey, H. (2000) 'Rapport management: a framework for analysis' in H. Spencer-Oatey ed. *Culturally Speaking: Managing Rapport in Talk across Cultures,* 1st ed., London: Continuum, 11-46

Thomas, J. (1995) *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics,* Harlow: Pearson Education